法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-08-29

［学部企画記録］　いいたてミュージアム

稲垣，立男

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
異文化 / 異文化
(巻 / Volume)
16
(開始ページ / Start Page)
283
(終了ページ / End Page)
296
(発行年 / Year)
2015-04

Hosei University Repository

［学部企画記録］

いいたてミュージアム

法政大学国際文化学部教授　稲垣立男

「いいたてミュージアム－までいの未来へ記憶と物語プロジェクト－」。飯舘村のこと、飯舘村に起こったことを県内外に広く発信し、未来の世代へも伝えていこうというプロジェクトです。わたしたちは、村民のみなさんのお宅におうかがいし、みなさんにとっての「古いモノ」「大事なモノ」「歴史的なモノ」を見せていただき、それにまつわるお話を集めてきました。「モノ」にまつわるお話から見えてきたのは、震災前の豊かな村の姿でした。この展示では今年度に集めた「モノ」とそれにまつわる「ストーリー」をご紹介します。「モノ」が語る力を借りて、村の姿を皆様にお伝えできればと思っています。
（いいたてミュージアムリーフレットより）

はじめに

2014 年 12 月に法政大学市ヶ谷キャンパスで実施された展覧会「いいたてミュージアム」は、いいたてまでいの会[1]、はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会[2]、法政大学国際文化学部の共催による企画展である。この企画は、文化的視点からの震災支援を目的として飯舘村および各仮設住宅での村民の村の生活にまつわる聞き取り調査を実施、その成果を展覧会を通じて広く紹介するものである。

この展覧会を法政大学で開催することになったきっかけは、同年３

Hosei University Repository

月に福島市で開催された展覧会「いいたてミュージアム」[3]に稲垣がアドバイザーとして参加したことによる。

飯舘村は、2011年3月11日に起こった東日本大震災と福島第一原子力発電所のメルトダウンによる放射能飛散の被害による被災者を村に受け入れていたのだが、1ヶ月余りを経た4月22日、突然計画的避難区域に指定されて同年5月末には全村避難に至った。現在でも多くの住民が避難生活を強いられている。

私自身それまで被災地とは直接的な関わりを持っておらず、そうした点からも「いいたてミュージアム」の取り組みは興味深く、またこのような文化的支援活動に国際文化学部の学生と共に関わることできればという思いも以前よりあった。その旨をまでいの会にお伝えしたところ、快く受け入れていただいた。2014年の春から夏にかけては現地での取材活動を、同年の冬に展覧会や講演会を大学で開催することとなり、それらの運営について学生と共に関わることとなった。

仮設住宅での取材（学生による記録）

展覧会に先立って飯舘村の皆さんへの取材と「大切なもの」をお借りするために、企画メンバーの皆さんとともに仮設住宅などを訪れた。その「もの」にまつわる話や飯舘村での生活についてお話を伺った。

※以下は参加学生による飯舘村の方々への聞き取りの記録である。

第一回目の聞き取り調査

場所：明治仮設住宅（福島市）日時：2014年6月7日（土）

参加者：稲垣立男、橋田悟、金秋りさ、嶋崎由依、山本詩帆（法政大学国際文化学部）坂内まゆ子（いいたてまでいの会）川延安直、小林めぐみ（福島県立博物館）

いいたてミュージアムに協力させていただく為に明治仮設住宅を訪

Hosei University Repository

れた。この企画に関して学校内で話し合いは行われていたが、実際に聞き取りに参加させていただくのは今回が初めてであった為、明治仮設を訪れる前にまでいの会の事務所にて、いいたてまでいの会の坂内さん、福島県立博物館学芸員の川延さん・小林さんからいいたてミュージアムのお話を伺った。

いいたてミュージアムの意義や今後の進め方を伺い、これまでの活動内容として既に聞き取りをしてお預かりしているいくつかのものを紹介していただいた。道端で見つけた繭、蜂の酒漬け、商店のお守り、平成元年のチラシ等のキャプションや説明を聞くことで、１点１点からそれを所持している方の日常や村の風景を思い浮かべることが出来た。さらに、実際にはお会いしたことのない方々や村に対して思いをはせることが出来た。

打ち合わせの後、飯舘村明治仮設住宅を訪問、本部所にて仮設住宅にお住いの長谷川きみのさんからお話を伺った。

長谷川きみのさんのお話より

- ８人兄弟の上から３番目に生まれた。（男女４人ずつ）
- 仲人さんと 15 歳のときに巡り合い、20 歳の時に結婚。
- 百姓をしていた…田畑、牛、馬、鶏（仕事の運搬用・食肉用）
- 結婚前は看護師を目指していたが、結婚後家事が多忙の為断念。
- 結婚当時、嫁ぎ先には小姑が５人もいた。
- 戦争で妹さんが軍需工場に招集された。
- 少女時代、馬車で移動したりしていた。
- 高等２年の時（今でいう中学２年）まで学校に通った。
- 卒業時に宝くじ 300 円分が全員に配布されたが誰も当たらなかった。（６年卒業時と高等２年修了時）
- 同級生は男女 32 人ずつ、クラスは男女別々。
- 冬には教室に火鉢が２つずつ置いてあった。
- はしかで出席停止になった以外は皆勤。

Hosei University Repository

・　体育と体操が好きだった。60歳を過ぎてから舞踊も始めた。（文化センターで踊ったりもした）
・　手踊り、田植え踊り、ししまい踊り等の飯舘村の踊りがある。

写真１　長谷川きみのさんへの取材

以下は長谷川さんがいいたてミュージアムに提供してくださったものである。

・　ハエ取り…今では中々目にすることのないガラス製。結婚した当時から嫁ぎ先にあったもので、よく台所に置いてあった。
・　着物の帯…村唯一の織り師である赤石澤さんが織ってくれたもの。
・　写真…20歳のころ友人と撮ったもの。（昭和19年1月23日）
・　漢字やことわざなどを書いたメモ…震災前と震災後のものがある。裏面が当時の暮らしや行事を知らせてくれる。「大切なもの」と書かれた封筒に入っていた。

実際にお話を伺う事で、当時の村の様子や長谷川さんの暮らし方を感じることが出来、聞き取り側の私たちも提供していただいたものへの愛着が深まった。今回は、それらをお預かりさせていただいて聞き

Hosei University Repository

取りは終了した。

震災による飯舘村のような状況だけでなく過疎化によってなくなってしまいそうな村や場所が沢山ある現状が日本にはある。今回のいいたてミュージアムをモデルケースとして完成させることで、今後に存在していた村がなくなってしまいそうな時に、このような形で村を思いだし、記憶するという機会が作ることができる。このプロジェクトに関わる事ができたのはとてもよい経験になった。

・1　展示キャプションより

メモ 「たいせつなもの」と書かれた封筒に入っていた、チラシやカレンダーの裏を利用して長谷川さんが気に留めた漢字やことわざを書いたもの。震災の以前から続けられており、綺麗な文字でびっしりと埋められた紙の裏を見ると、その当時の時間やイベント、暮らしが感じられる。

・2　展示キャプションより

蝿取り インテリア雑貨となりそうなこのガラスの置き物。実は「ハエ取り」である。長谷川さんさんが嫁ぎに来たときからあったと言う。使い方はこのガラスの内側に水を入れて、真ん中の空洞のところに少しご飯を置いておき上からハエが逃げないように蓋をする。これだけでハエが自然と寄って来て捕らえることができる。現在は殺虫剤の使用により人体への影響が懸念されるが、当時はそのようなことはなかった。また、ガラスの質も良く保管も良いためこのように現在に残っているのは稀で貴重である

Hosei University Repository

第二回目の聞き取り調査
場所：いいたてまでいの会事務所　日時：2014 年 6 月 28 日
参加者：稲垣立男、齋藤瑞季、最上拓朗、井口志乃（法政大学国際文化学部）坂内まゆ子（いいたてまでいの会）川延安直、小林めぐみ（福島県立博物館）

佐藤健太さんを招き、２回目の聞き取りを行った。

佐藤健太さんのお話より

- 自然がとても豊かで、春夏秋冬がそれぞれの匂いがするほどわかりやすかった。
- 川でよくイワナを手掴みで獲っていた。
- 仕事の帰り道に山菜を採って家で天ぷらなどにして食べていた。
- セブンイレブンのおでんの大根は飯舘でとれたもの（かなり質がよかった。）
- 夏はほぼ毎日外でバーベキューをしていた。
- 健太さんたちの世代に村を任されようとしたときに震災が起こってしまった。
- 自分たちの思い出の場所（川、山など）が除染作業によって出たごみの仮置き場にされるためどんどん奪われている。
- 震災当時、自分たちが置かれている状況を知るために積極的に情報収集を行った。
- 健太さんたちの世代が震災後に積極的に活動を行っている。（広島の方へお話を伺いに行くなど）
- 健太さんは様々な国で福島について知ってもらうために講演会を多数行っている。（フィンランドなど）
- 福島に新たな価値を創造するためにＮＰＯ法人団体を立ち上げた。劇団として公演を行ったり、フェスを企画したりするなど、

Hosei University Repository

「被災地」というイメージのみに留まらずに魅力を感じてもらえるような活動を目指している。

佐藤健太さんのお話の中の、「賠償は出ないが価値のあるもの」という言葉に胸を打たれました。震災や原子力発電所の事故の影響で損害を受けたものには賠償金が支払われます。しかし、同じように失われた自然や人と人との繋がり、思い出は賠償金で補えるものではありません。そんな本当に「価値あるもの」を、お借りしたお酒と佐藤さんのお話から感じ取ることができました。（井口志乃）

飯舘村出身の佐藤健太さんに聞き取り調査を行った際、飯舘村の自然に溢れた風景、その中で自然と共に暮らす住民の人たちの様子が自然と頭の中に流れてきて、不思議と親近感を覚えました。だからこそ仮置き場の話を聞いて怒りもこみ上げてきたし、同時にこの現状をもっと多くの人に知ってもらいたいと思いました。（最上拓朗）

飯舘村のお話を聞いたり思い出の品や写真を見せて頂いたとき、私も彼らの思い出を疑似体験しているように感じられました。日頃から人々のつながりが強いこと、美しい村の風景、そのどれもがとてもあたたかなものでした。また現在福島では新たな文化として舞台やイベ

写真２　佐藤健太さんへの取材

Hosei University Repository

ントが企画されているそうです。福島と聞いて、震災のマイナスなイメージが先行してしまう人は少なくないと思います。しかしそうではなく、元々の福島の姿や未来へ向けた新たな取り組みなど、前向きな部分がより多くの人に伝わればと思います。（齋藤瑞季）

・3　展示キャプションより

おこし酒 今は避難所となってしまった飯舘村の畑のお米で作られた貴重なお酒。元々「村おこしをしよう」という願いのもとに作られたお酒で、今もその意思は村を超えて、福島全体を盛り上げようというかたちで受け継がれている。ちなみにこれらは2010年の2月に発売されたもの。

展覧会「いいたてミュージアム」

2014年12月11日～17日に法政大学市ヶ谷キャンパスで福島での展示に続き第二回目となる「いいたてミュージアム」が開催された。

学生たちが展示の準備から関わり、キャプションや解説のテキストなども担当し、展示期間中には会場管理を手分けして行った。大々的に告知していたわけではないが、多くの学生や教職員の方々に観に来ていただいた。また、学外からも美術関係者や震災後の支援活動をしているNPO関係者にも会場にお越しいただいた。

会場でのアンケートには、「収集品から伝わる物語を読み取ることができてよかった」「いままで知り得ないことがわかったような気がします」「決して忘れないために何かをしなければならない」「若い学生さんがインタビューなどの掘り起こし、記録作業をすることは素晴らしいと思う」など、多くのご意見をお寄せいただいた。

Hosei University Repository

・　いいたてミュージアム・コレクション（2014 年まで）

1．藍綬褒章授章記念冊子
2．放射線量計測記録
3．飯樋地区チラシ（２枚）
4．1982 年盆踊り写真
5．いいたて村見守り隊スケジュール表
6．チラシごみ箱
7．お守り（２個）
8．山繭
9．鉄屑
10. スズメ蜂の焼酎漬け
11. 飯舘村合併時地図
12. 新村建設計画書コピー（３枚１組）
13.「教育」No.792　2012 年１月号（１冊）
14. 飯舘復興の桜 CD（３枚・うち１枚開封済み）
15. 飯曽小唄　歌詞プリント
16. 飯舘村風景
17. 写真
18. 桜の木の枝と保護布
19. 桜の木の保護布
20. 広報いいたて
21. ガラスのハエとり
22. 漢字のメモ（３枚）
23. 飯舘おこし酒（製造年．月　2010.12）
24. 飯舘おこし酒 1.8l（製造年．月　2010.9）
25. 愛のうわずみ（製造年．月　2010.11）
26. いいたてそば焼酎山中郷（製造年．月　2008.10）
27. 健康生活手帳（２冊）
28. どぶちえ（２本・大、小）

Hosei University Repository

29. ちえこのごんぼっぱもち（２連）
30. 写真（2013 年 11 月撮影）１枚
31. 交通安全のぼり
32. 渡辺輪業自動車整備工場ティッシュ　１箱

いいたてまでいの会が収集したコレクションに、学生たちが聞き取りに行ってお借りしてきたものが加えられた。この中から今回の展示用に厳選し、約 20 点の収蔵品が会場に展示された。

写真３　メディアラウンジでの設営作業

写真４　完成した「いいたてミュージアム」展示会場

Hosei University Repository

講演会

展覧会会期中の 12 月 17 日、「メディアと社会」の講義のゲストとして飯舘村元副村長で、いいたてミュージアムのコレクションの協力者でもある長正増夫さんに講演をしていただいた。

飯舘村が震災以前から取り組んできた村づくりのお話に始まり、震災後の村に起こった出来事や取り組みについてのお話を、また復興が進まない苛立ちなどについても率直な現状をお話しいただいた。さらに長正さんからは、村だけの問題にとどまらず、これから日本全体や地域社会の未来をどう作っていくのか、真摯に考えていかなければならないという問題定義があった。講演会の後半では、飯舘村明治仮設管理人の小林洋子さんから、現在の仮設住宅でのくらしについて、補足してお話しいただいた。

震災後の被災地の現状をあまり知らなかった学生がほとんどで、長正さんからの体験に基づくお話に感銘を受けた様子であり、また会場には学外からも大勢の方が講演を聞きに来られており、講演会後にはそうした皆さんから多くのご意見やご質問があった。

写真 5　講演会（S305 教室）

Hosei University Repository

結び

「までい」という言葉は、この地域で使われている方言であり「心を込めて」あるいは「慎ましく」といった意味があるそうで、この地域の復興のスローガンとなっている。今回の企画は、全体として決して大げさではないささやかなアプローチではあるが、時間をかけてじっくりと取り組んでいる。そのような取り組みであることが人と人とのつながりを慈しむ「までい」の精神をよく伝える結果となったのではと考えている。福島から離れた東京で、飯舘村の現状を伝え、お互いに繋がるきっかけとなったことが大きい。また、取材に始まり展覧会運営や作品の管理などに関わることができたことは、学生たちには大変貴重な経験であった。

被災地における文化的支援活動は現在各地域で多く行われており、それらについての様々な議論や批判もあるが、今回の展覧会での人々の反応を見ていると、「までい」な取り組みの成果である、いいたてミュージアムの展示品は、地域の人々の日々の暮らしや営みについて自分たちの生活と照らし合わせながら思い起こさせるきっかけとなり、お互いの日常を共有できるような感覚を人々に広げる力があることがあるように思う。手法として未完であり、実験的な部分も多いと思われるが、こうした活動[4]を通じてどのようなことができるのか、これをきっかけとして被災地との関わりを今後もさらに考えていきたい。

注釈

1　いいたてまでいの会

離村を余儀なくされた福島県飯舘村の村民が相互の絆を維持し、将来の帰村を目指すための活動を推進することを目的とする。飯舘村の行政と協力関係を維持しつつ、民間組織として自由な立場で飯舘村の復興に協力する。

Hosei University Repository

活動内容

1．飯舘村の復興及び村民の健全な生活に関する支援事業

2．飯舘村の教育環境の維持・発展のための協力・支援事業

3．飯舘村民相互の絆の維持・発展を支援する事業

4．その他目的を達成するために必要な事業

2　はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会

福島県立博物館が事務局を務め、福島県内で文化事業に携わる博物館・大学などが参加する実行委員会が運営するプロジェクト。福島県の人々が自らの文化力を高めることで郷土への自信を回復し、さらに福島の文化状況を広く県内外に発信することで日本の文化発展にも寄与しようとするものです。平成 26 年度文化庁地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業。（実行委員会構成団体：南相馬市博物館、福島大学文化による地域創造研究所、福島大学うつくしま未来センター、いいたてまでいの会、NPO 法人まちづくり喜多方、福島県立博物館）

3　「いいたてミュージアム－までいの未来へ記憶と物語プロジェクト－」コレクション

2014 年 3 月 3 日（月）～ 3 月 9 日（日）10：00 ～ 17：00

ふくしまキッチンガーデンビル 2 F（福島県福島市栄町 10-3）

4　同展は法政大学での展示の後、2015 年に神戸、京都に巡回する予定である。

「いいたてミュージアム巡回展@神戸」

2015 年 1 月 10 日（土）～ 1 月 15 日 11：00 ～ 19：00

デザイン・クリエイティブセンター神戸　KIITO

「いいたてミュージアム巡回展@京都」

2015 年 01 月 24 日（土）～ 2015 年 01 月 28 日（水）

京都造形芸術大学　瓜生山キャンパス瓜生館 1F

Hosei University Repository

・展覧会「いいたてミュージアム」
●会場：法政大学市ヶ谷キャンパス外濠校舎１階メディアラウンジ
●会期：2014年12月11日（木）～ 17日（水）12：00 ～ 18：00

・講演会
●日時：2014年12月17日（水）11：10 ～ 12：40
●会場：法政大学市ヶ谷キャンパス外濠校舎３階 S305教室「メディアと社会」講義内
●ゲスト：長正増夫（飯舘村民・元副村長）
●聞き手：稲垣立男（法政大学国際文化学部教授）・坂内まゆ子（いいたてまでいの会）

●主催：いいたてまでいの会、はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会、法政大学国際文化学部